

東寺観智院金剛藏『天台血脈』について

— 付 影印 —

宇都宮 啓 吾

— はじめに —

東寺観智院金剛藏に『天台血脈』（二九〇番箱一号）として登録される血脈が存する。本書は無題であるが、そこに記載される内容は天台宗山門派の僧侶の血脈であり、そのために『天台血脈』として仮称され、『東寺観智院金剛藏の概要』（京都府教育庁）においては松本光隆博士の解題が存するものである。

従来、天台宗山門派系統の師資相承の実態を知ることのできる資料としては、『大日本仏教全書』や『群書類従』（正・続）、『天台宗全書』（正・続）の如き叢書類や上杉文秀『日本天台宗史』（破塵閣書房 昭10 続篇に『日本天台系譜』附載）、恵谷隆戒『円頓戒概説』（大東出版 昭12）等の研究書、また、近年では『台密諸流伝法全集成』（延暦寺学問所監修 東方出版 昭62）や『台密諸流傳法印信纂脩』（延暦寺学問所監修 芝金聲堂 平13）等の印信類が存するが、血脈として公開されたものは真言宗系統の血脈に比して非常に少ない。例えば、平安・鎌倉期の真言

宗系統の僧侶を検討する場合、『血脈類聚記』や『野沢血脈』の如き血脈類、また、近年では醍醐寺蔵「伝法灌頂師資相承血脈」(醍醐寺文化財研究所『研究紀要』第一号 築島裕 「醍醐寺蔵本」伝法灌頂師資相承血脈) 昭53)が広く利用され、此書については、その翻刻・索引も存する⁽¹⁾。

その一方で、天台宗山門派系統の血脈の場合、翻刻・索引の公開については更に少なく、例えば、国語学の分野においては国会図書館蔵『山門法流血脈』や本書(東寺観智院金剛藏「天台血脈」)等が利用されているが、孰れも翻刻や索引の類が公にされていない。

特に本書は、訓点資料の分析において活用されることの多い資料であり、公開の俟たれる資料と言える。

稿者は、従来より訓点資料の研究という視点から師資相承の問題を扱っており、血脈の収集と分析はその研究上果たすべき重要な課題と位置付けている。そのような立場から、この度、本書の公開をさせて頂く。

一 書誌的事項

本書は、料紙(楮紙打紙 白色)や書風の点から考えて鎌倉時代後半頃(後期か)の書写と考えられる。装幀は卷子装で軸無し、但し、巻末に糊(豆糊)の跡が残っていることから、本来は軸が存したものと考えられる。また、表紙も現存しないが軸部と同様に巻首部分に糊(豆糊)の跡があるため、本来は表紙が存したものと考えられる。

この点については、此度、西教寺正教蔵に本血脈を元とした(本文は同一。但し、西教寺本では、紙背は「裏書云」等の形で表書に含まれる。)江戸時代前期の板本の存することを確認し、この板本には当初より外題等が存しておらず、本血脈が開板された江戸時代前期には既に表紙等の題名を示すものが失われていたものと考えられる。

料紙は三十紙で、全紙とも白色の打紙ながら、巻末の二紙のみ風合いが異なることから後補と考えられ、二十八紙

までの第二筆とそれ以降の第二筆（但し、二十九紙の初めの部分には第一筆も存する）とに分かれる。但し、第二十八紙までの中にも「相実―政春」の流れを追補した箇所が間々見られる。法量は縦三〇・三種、全長は一五三三・七種で、各紙長は次表の通りである。

界線は押界で界幅は一・八種、界高二六・二種で血脈を記す為の横界として第一段目六・八種、第二段目六・五種、第三段目六・六種、第四段目六・三種の高さの界が施されている。

三 血脈の概要

次に、本書の血脈の概要を以下に述べておく。

まず、「胎藏金剛阿曇荼羅相承師々血脈譜」として胎藏界・金剛界それぞれ大日から最澄・義真に至る血脈を記している。次に、「雜曼荼羅相承師々血脈譜」として大牟尼尊から最澄までの血脈、そして、「天台法花宗相承師々血脈譜」として久遠実成多宝塔中大牟尼尊から最澄・義真までの血脈、「天台円教菩薩戒相承師々血脈譜」として光師子座上盧舍那仏から最澄・義真までの血脈を記している。続いて「慈覚大師」として胎藏・金剛界・蘇悉地それぞれに大日から慈覚大師円仁に至る血脈を記している。続いて、「大唐浄住

52・8 cm	第25紙	52・8 cm	第19紙	52・7 cm	第13紙	52・9 cm	第7紙	43・4 cm	第1紙
52・8 cm	第26紙	52・7 cm	第20紙	52・9 cm	第14紙	52・9 cm	第8紙	52・8 cm	第2紙
30・9 cm	第27紙	46・0 cm	第21紙	53・0 cm	第15紙	53・0 cm	第9紙	52・9 cm	第3紙
50・4 cm	第28紙	46・0 cm	第22紙	52・9 cm	第16紙	52・9 cm	第10紙	52・8 cm	第4紙
53・5 cm	第29紙	53・0 cm	第23紙	52・7 cm	第17紙	47・2 cm	第11紙	52・9 cm	第5紙
53・5 cm	第30紙	52・9 cm	第24紙	52・7 cm	第18紙	52・9 cm	第12紙	52・9 cm	第6紙

寺海雲記」として胎藏・金剛界それぞれに大日・毘盧舍那如来から義操とその付法者、法潤とその付法者までの血脈を記し、「大唐慈恩寺造玄阿闍梨付属師資血脈」として胎藏・金剛界それぞれに毘盧舍那如来から円仁、また、円珍・義真らの天台系の入唐僧に至る血脈を記している。その後に伝教大師最澄から始まる血脈と慈覚大師円仁から始まる血脈とが続き、それらは孰れも相実・政春（但し、政春は後補）に至る血脈である。本血脈は、この後、長意・覚惠・仁観・覚空・智証大師円珍・弘法大師空海・皇慶・忠尋・行巖・院昭等から始まる血脈が存するが、孰れも相実・政春（但し、政春は後補）に至る血脈である。

相実（一〇八八―一一六五）は比叡山において良祐・陽宴・相蒙等に師事して天台事相を学んだ学僧であり、比叡山無動寺の法曼院において法系を伝えたことから、この流れは法曼流と称せられている。また、政春は相実の弟子にあたり、法曼流が住侶方と門跡方とに分かれるその一方、門跡方を担った人物である。先にも述べた如く、本血脈には二筆が存し、第一筆が相実までで終わっており、これに書き継ぎや追補の形で第二筆が存する。この第二筆のうち、相実の書き継ぎは孰れも政春であり、又、追補の形で新たに血脈が加わっている箇所も相実・政春・全玄・家寛・勝基に始まる血脈で、そのうち、政春・家寛・勝基は孰れも相実の弟子に当たる。

以上のような法脈から考えるならば、本血脈は天台宗山門派の中でも法曼院の流れを伝えるべく作成された血脈と考えられ、更には、西教寺本には本血脈の最後に「相実―円長―尊源―公誉（他九人）」との血脈も存し（東寺本の追補部かと考えられる）、法曼流門跡方への傾向が窺われる。

又、本血脈中の最後、追補部分の家寛から始まる血脈の中に「家寛―良宴―静快祖師」との記述が存し、本血脈（「天台血脈」）中において「祖師」との記述はこの「静快」のみであり、本血脈の追補に関わった人物が、「相実―明玄―家寛―良宴―静快」という法脈に連なる人物である可能性も存し、この静快については更に検討が必要である。

四 おわりに

本血脈は鎌倉時代前半頃までに至る天台宗山門派の血脈として非常に詳細であり、師資相承の問題や諸宗交流に関する資料として貴重なものであることが知られるが、更には、記載された人物の中には天台声明の祖とも言うべき家寛に始まる血脈が存することや浄土宗の西山上人善恵房証空も記載されるなど、詳細に検討することによって更に種々のことが明らかになるものと思われる。又、西教寺本を利用することで本来の全体像や欠損部をも確認することが出来る。

その意味において、又、本血脈を活用の便に供するため、本稿に次いで西教寺本をも参看した形で翻刻・索引を公開したい。

(注)

(1) その他にも東寺観智院金剛藏の血脈の翻刻・公開については武内孝普氏らによって積極的に行なわれている。

【付記】

本書の調査・公開に際しては、東寺御当局並びに東寺宝物館御当局に御高配を賜わった。又、西教寺聖教の調査に関しては西教寺御当局並びに前阪良憲師に御高配を賜わった。記して深謝申し上げる次第である。

本稿は平成十五年度文部科学省科学研究費補助金・若手研究(B)「西教寺並びに法勝寺流聖教における訓点資料の基礎的研究」の成果である。